

上杉謙信の崇敬と祭祀

— 謙信の「仏教」と米沢藩における廟堂祭祀 —

加澤 昌 人

〔抄 録〕

本論では、従来研究対象とされてきた文書や記録、あるいはこれまで取り上げられなかった廟堂祭祀に関する記録を、宗教的な視点から見直すことによって新たな謙信像を考察した。

謙信は書状や願文において、「筋目」を強調する。まず従来研究の対象とされてきた文書や記録を視点を変えて考察し、謙信の戦の「筋目」とは、王法と仏法の回復という信念であることを読み解くことができた。

次に、高野山の無量光院清胤との関係と謙信の信仰を、清胤の書状と高野山からの返書三通及び関係文書を、初めて関連づけて

考察することによって、伝法灌頂まで遂げた謙信の法体の実態を浮き彫りにした。

さらに、景勝による米沢城本丸への謙信廟建立の過程と、藩政期における廟堂祭祀の一端を論じた。ここでは祭祀にあたる寺院の記録等により廟堂における勤行と信仰及び藩主初入部の際に謙信廟で行われる「御武具召初」から、他藩に類例のない祭祀の特色を明らかにした。

キーワード 筋目、王法と仏法、護国經典、法体、御堂祭祀

はじめに

近年の上杉謙信⁽¹⁾の研究で、筆者が特に注目したものに竹田和夫氏、木村康裕氏、長谷川伸氏の論文がある。⁽²⁾しかしこれらを含めても、これまで謙信の法体に至る過程やその信仰の根底についてはほとんど論

じられてこなかった。本論では宗教的な視点から新たな謙信の人間像を再検討した。

謙信は一般的には「義の武将」などといわれる。しかし謙信自ら「義」という言葉は使わず、書状や願文において、しばしば「筋目」を強調する。第一章で取り上げた文書や記録は従来から研究の対象と

されてきたが、視点を変えて考察することで、謙信の戦の「筋目」とは、王法と仏法の回復という信念であると読み解くことができた。

第二章では、高野山の無量光院清胤との関係と謙信の信仰を、清胤の書状と高野山からの返書三通及び関係文書を、初めて関連づけて考察することによって、法体となり伝法灌頂まで遂げて、ついには法印権大僧都に任ぜられた謙信の法体の実態を浮き彫りにした。

第三章では、景勝による米沢城本丸への謙信廟建立の過程と、藩政期における廟堂祭祀の一端を検討した。これまで廟堂祭祀については藩の宗教政策の面からは論じられてきた。⁽³⁾ここでは寺院の記録等により廟堂における勤行と信仰を、また藩主初入部の際に謙信廟で行われる「御武具召初」から、他藩に類例のない祭祀の特色を明らかにした。

第一章 謙信の戦の「筋目」と信仰

第一節 謙信の戦の「筋目」

謙信が永禄三年(一五六〇)四月二十八日、常陸の佐竹義昭に宛てた書状には、「総体景虎事、依怙不携弓箭候。只々以筋目、何方へも致合力迄候」とある。⁽⁴⁾また同七年六月二十四日には「輝虎守筋目不致非分事」と題する祈願文を越後の弥彦神社等に奉納した。⁽⁵⁾

その内容は、第一に関東出兵は関東管領上杉憲政の指図によること、次に信濃出兵は信濃諸将が武田信玄にゆえなく奪われた所領回復のためで非道はないとする。第三に越中のことは亡父以来の申し合わせで

管領の同意によりこれも非道はない。第四に出兵したいずれの国においても一箇所も自らの利益に関係したものはなく、その場の依怙も全くないという。そして最後に、「輝虎一代改而不致非分事、惣別大小事共、從神慮外者頼不申候、輝虎不知非道不存候」と言った。この謙信の弥彦神の「神慮」に叶う「筋目」をまず理解しなければならぬ。

まずはじめに朝廷との関係である。謙信は、父長尾為景が越後の内乱平定のため朝廷に乞い、天文四年(一五三五)に綸旨(一茶七〇号)を賜って新調した旗を継承して、これを掲げた。朝廷との関係により自らの立場を正当化するためのものである。紺地に赤の日の丸を染めた旗は、上杉家では「天賜之御旗」「御家之旗」と称し、上杉軍の象徴となる。謙信の出陣式「武禊式」では本尊とともに祭壇に供えられた。「武禊之次第」⁽⁷⁾には、「東方ニ構寶廟安鎮於守本尊一軸、檀上備家之旗、団扇、鞭、献土海山川之五味并供淨沾」(傍線筆者)とある。

また天文二十二年(一五五三)の上洛(以下「天文の上洛」という)において、後奈良天皇から「平景虎於住国并隣国挿敵心之輩、所被治罰也」と綸旨(家付四、五茶号)を賜った。父為景、兄晴景も綸旨を賜って越後の内乱平定に努めている。謙信の場合も、信濃諸将や関東管領上杉憲政の要請に応えた「筋目」をもった出兵のためには、父や兄と同様に綸旨が必要とされた。天文の上洛の目的はこの綸旨の獲得にあった。

綸旨を掲げて戦うことは、源頼朝が「最勝王勅」(以仁王の令旨)を掲げて挙兵したことに似ている。「吾妻鏡」では冒頭にこの令旨を載せて、頼朝の挙兵が鎮護国家の經典『金光明最勝王經』を奉じる

「最勝王勅」を拠り所に、「追討 王位推取之輩」「打亡仏法破滅之類」して、王法と仏法を回復するものであったことを強調している。⁽⁸⁾

次に幕府との関係においては、晴景の跡を継いだ謙信は、天文十九年（一五五〇）二月に幕府から守護の待遇である毛氈鞍覆と白笠袋の免許を受けた（（家わけ一）
（四号他））。これも当時、將軍偏諱の授与とともに戦国大名が幕府と結びつき、権威を獲得し自らを正当化しようとする一つの方法であった。また永禄二年（一五五九）の上洛（以下「永禄の上洛」という）の際には將軍義輝に「条書」（家わけ四）
（七号等）で、「本国之事、縦如何体之禍乱雖致出来候、相応有御用等、於被召留者、国之儀一向捨置、無二可奉守 上意様御前」と決意を誓っている。

あるいは永禄九年には、「（足利義輝）祈申所之事」と題する願文（家わけ五）
（一五号等）（便宜上漢字に改める）で、「上意様仰せ置かるる筋目」によって北条氏康と和睦して、「天下へ令上洛、守筋目」「京都公方様、鎌倉公方両公方様取り立て」「堂舎仏塔、寺社神領、仏法王法、如前々御意見を申致させ」「仏法王法ともに正路、賞罰の輝虎御警固を申へき者也」と吐露している。ここでは京都・鎌倉両公方の擁立と、仏法・王法の回復と警固の念を表明している。

もう一点は、願文等に見られる「筋目」である。謙信は「守筋目」願文と併せて「武田晴信悪行之事」の願文（家わけ四）
（九号等）を弥彦神社と春日山城内の看経所に納めた。⁽⁹⁾信玄の罪状の数々を訴えたその主旨は、信玄が寺社を粗末にして「仏法破滅事」を行えば、「誰か可尊神慮哉」とし、また実父を国外へ追放した親不孝を「仏神の内証に叶ふべからざる事」と非難した。そして信玄を退治し、社寺を復興するというの

である。このほか、永禄六年に越後国三島郡出雲崎の薬師寺に納めた願文には、五檀の法を修行するのは「仏法王法之敵」である武田信玄、北条氏康を調伏するためであるといっている。⁽¹⁰⁾これらの他にも謙信は願文や書状で「筋目」を吐露している。⁽¹¹⁾

すなわち謙信の「筋目」とは、この「天賜之御旗」と「住国并隣国治罰」の論旨を掲げて戦い、朝廷と幕府の権威を回復することであった。朝廷や幕府と結びつき、自らを正当化しようとすることは、他の戦国大名と同様であるが、謙信の場合には、「筋目」の根底に王法と仏法の回復という信念があった。小林健彦氏は、謙信の上洛が本願寺、朝倉氏、六角氏から通行の安全を保障されて行われたことは、謙信が自ら天下に号令するということではなく、將軍—守護秩序の下で行われたことを示すものであると指摘している。⁽¹²⁾

第二節 王法と仏法の回復

前節で見た謙信の「筋目」の根底にある王法と仏法の回復という信念は、永禄四年（一五六一）四月の鎌倉鶴岡八幡宮参詣に見ることができる。謙信は関東管領就任の拝賀として鶴岡八幡宮に参詣した。『謙信公御書集』⁽¹³⁾永禄四年四月二十一日の条に「右大将源頼朝卿社参如先例」とある。これは『御書集』成立の元禄期以前において、謙信の行動と『吾妻鏡』を関連づけてとらえていたことを示すと考えられる。頼朝の八幡宮参詣とは、治承四年（一一八〇）十月十六日に参詣して初めて長日の勤行を行ったことをさす。その時には鎮護国家の三部経典である『法華経』『仁王経』『金光明最勝王経』の他、『大般若

經』『觀世音經』『藥師經』『壽命經』等が読まれている。

謙信の参拝について、『上杉家御年譜謙信公』永祿四年夏四月下旬の条には、「神前ニ礼拝有テ婦依ノ丹祈ヲコラサル（中略）社僧ハ真読ノ仁王般若ヲ転シ、祝部ハ中臣ノ祝言ヲ唱エ」とあり、続けて次のように記している。

（八幡宮は）神徳既ニ東海ニ施シ、利生普ク八州ニ満テ、邦家擁護ノ宗廟靈威奇妙ノ勝境ナリ。頼朝九代ノ將軍其ヨリ足利基氏、今ノ義氏ニ至ルマテ関東鎌倉ノ公方都テ九代並ニ管領上杉家皆鶴岡ニテ拝賀ノタメ社参アリ。此行仮リニ憲政ノ讓ヲ受、先規安座ノ吉例ニヨリ拝賀アルヘシト議定ス。

謙信は先例に倣い、「邦家擁護ノ宗廟」に関東管領として参拝し、分国平和のために護国經典の『仁王般若經』を奉納したのであった。八幡宮は戦国期には衰退してはいたものの、北条氏綱が中興し、鎮護国家祈禱の場としてその機能を果たしていたのである。

次に、永祿五年の越後国分寺の再興である。『謙信年譜』の同年七月二十五日の条には次のようにある。

頸城郡国分寺五智如来堂供養アリ。政虎公往年ヨリ真言ノ密教ニ御帰依有テ、今般五仏ノ秘法御伝受也。当月中旬ヨリ国分寺ノ五智如来堂ヲ再興シ玉フ。（中略）供養ノ導師ハ高野山無量光院ノ住持清胤法印ヲ招請シ玉フ。此節勅使トシテ勸修寺殿下向シ玉ヒ、（中略）供養ノ規式、経営ノ作法、美尽セリ。

もともと国分寺は護国經典の『金光明最勝王經』の誦誦により一切の災厄を消滅させるために建立された。中世後期においても国分寺で

は護国法会が行なわれ、後奈良天皇は諸国の一の宮に真筆の『般若心經』を奉納しており、越後にも天文十四年（一五四三）に下賜された。当時もなお鎮護国家の役割が果されており、勅使が下向している点からも、謙信の国分寺再興も護国法会の執行が目的と考えられる。

この『金光明最勝王經』⁽¹⁶⁾は、巻五「四天王觀察人天品第十一」、巻六「四天王護国品第十二」で四天王の功德を述べ、この經を保つ国王があれば、四天王がその国王を擁護し、その国土から怨敵の災禍を消滅させると説く。また「守筋目」を誓った弥彦山に祀られる弥彦第三王子草薙大明神の本地仏は毘沙門天である。⁽¹⁷⁾この毘沙門天像は弥彦山麓の宝光院に現存する。ここに北国の武將謙信が王法・仏法を守護する北方の毘沙門天を奉じる所以を見出すことができる。

この他、法音寺（米沢市、後述の二ノ丸寺院の筆頭）には室町期の『法華經』八卷二箱が伝世し、全巻に「毘沙門堂」と書き込みがある。春日山城内の毘沙門堂でも鎮護国家の經典『法華經』が読まれていたと考えられる。鎮護国家もまた謙信の信念の一つであった。

三点目は、謙信の署名が初見される元龜元年（一五七〇）の祈願文^(九卷九拾九)である。便宜上漢字に改める。

看經之次第

- | | |
|--------|-------------------------|
| 一 阿弥陀 | これは真言三百返、念仏千二百返、仁王經一卷 |
| 一 千手 | これは真言千二百返、仁王經二卷 |
| 一 摩利支天 | これは真言千二百返、摩利支天經二卷、仁王經二卷 |
| 一 日天 | これは真言七百返、仁王經二卷 |
| 一 弁財天 | これは真言七百返、仁王經二卷 |

一愛宕勝軍地藏これは真言七百返、仁王經二卷

一十一面 これは真言七百返、仁王經二卷

一不動 これは真言七百返、仁王經二ノ卷

一愛染 これは真言七百返、仁王經二卷

いすれも春二月中旬、越中へ馬を出し、留守中、当国関東何事なく無事にて、越中存しのま、一円謙信手に入候ハ、
明年一年ハ必ず日々看經申すべく候也

元龜元年

十二月十三日 謙信（花押）

御宝前

ここで注目すべき点は、全ての仏の前に護国經典の『仁王經』を読むことにある。標題が「看經之次第」であることから、戦勝祈願文とすべきではない。「越中存しのま、一円謙信手に入候ハ、」は、既に越中の平定を前提としており、越中平定後は領国平和のために『仁王經』を「明年一年ハ必ず日々看經申す」と誓ったのである。「阿弥陀」以下すべて安寧や福徳をもたらす仏であり、『仁王經』をそれぞれの仏に奉納するという。この願文は自らの血で染めた紙に書かれ、ここにも謙信の鎮護国家の信念と、それを自らの使命とする強い意志を読み取ることができる。

第二章 謙信の法体

第一節 謙信の受戒

謙信は七歳となった天文五年（一五三六）に春日山城下の曹洞宗林泉寺の天室光育のもとで学問修行を始める。謙信はこの年の秋に元服するので、これは出家ではなく学問修行であった。しかし以降も続く林泉寺での修行は、後に謙信が法体する要因の一つとなったのである。

天文の上洛において、謙信は紫野の大徳寺徹岫宗九に参禅して、宗九より「越之後州平氏景虎公授衣鉢法号三帰五戒日宗心」（上杉神社所蔵文書）と、在俗のまま受戒した。宗九は大徳寺九十二世住持で、同年に宮中で禅法を説き、後奈良天皇から国師号を賜っている。

そしてこの三年後の弘治二年（一五五六）六月二十八日、天室に書を送り、遁世の意を伝えた。署名は「長尾弾正少弼入道宗心」であった。¹⁸しかしその二ヶ月後の八月十七日には長尾政景（景勝の実父）宛の誓書（^{家わけ書}九七七号）で、「弓矢於遁候様、自他共批判可有之」と、政景等の意見に任せて国政に復帰した。政景への署名は「景虎」としている。

謙信はこの後、真言宗に傾倒していく。謙信は天文の上洛中に高野山に参拝し、無量光院の清胤と出会ったとされる。清胤については、無量光院の『先師過去簿』¹⁹によって略歴を知るのである。

一、上杉輝虎公帰依清胤法印、創建精舎於越府号法幢寺。令住請法印。（中略）且公剃髮而改名謙信、存生納都率天上絵像於法

印之所定。(中略)

第三世
前檢校執行法印大和尚清胤（寛永五年十月十日
入寂 寛永七年七月十九日）

字舜学房。越後国人。覚融之神足而繼融師主当院。上杉謙信聞胤之道徳就而剃髮入道為師資之約。更建立一字精舎、屈清胤為始祖。

この年、清胤は三十二歳であり、当時、無量光院には空海の再誕と称された八十一歳の前官覚融があつた。覚融はこの翌々年に没することから、清胤が住職となつたのは謙信上洛の前後と推測される。清胤は当時決して高い地位にあつたわけではないが、頭角を現してきた頃であつたと考えられる。

高野山の正智院には、延徳三年（一四九一）の「長尾能景・上杉房定父子等年齢書出」⁽²⁰⁾が存在する。また清浄心院は関東管領上杉家の菩提寺であり、謙信以後は越後との関係がさらに深まっていく。このような関係から高野山登山が行われたのであらうと考えられる。

謙信は永禄の上洛においても高野山に参拝した。この後、永禄五年（一五六二）に謙信は越後国分寺を再興し、清胤を越後に招請する。

時に謙信三十三歳、清胤四十一歳で、清胤は阿闍梨位に昇進してゐたと思われる。前章で見た国分寺再建の「謙信年譜」の記事には、「政虎公往年ヨリ真言ノ密教ニ御帰依有テ、今年五仏ノ秘法御伝受也」とある。また「高野山無量光院旧記抜書」⁽²¹⁾には、

清胤ト申ス住持戒行兼備之僧ニテ 謙信公無比之御帰依、御年二十二三之時清胤弟子ト御成、出家受戒御約諾有之。三十四五之御年右清胤ヲ受戒之師ト仰キ真言秘密金胎两部秘印明、多聞天、摩

利支天等大事悉ク御伝授。

とある。それぞれの「五仏ノ秘法御伝受」「清胤ヲ受戒之師ト仰キ真言秘密金胎两部秘印明」の記述から、謙信がこの時に清胤から受明灌頂を授けられたと考えられる。受明灌頂⁽²²⁾は密法を修学し実行することを経可する灌頂で、持戒清浄・信心堅固の機を扨んで引入投華させ、その所得の尊の印明を授けるものである。

次に清胤が越後に下るのは、天正二年（一五七四）十二月であり、この時に謙信は法体となる。これ以前に清胤から受明灌頂を受けるには、国分寺再興の時以外に機会はない。謙信は出陣式や陣中でも自ら護摩を修したといわれ、陣中に携帯した「旅壇具」（上杉神社所蔵）が伝世する。それが法体となつた天正二年以降の最晩年の数年間だけとは考えにくい。永禄年間に春日山城内の看經所に納める願文が多くなり、⁽²³⁾これにあわせて護摩を修したとすれば、受明灌頂を受けた時期は、国分寺再興の永禄五年を下らない。「無量光院旧記」には、「三十四五之御年」「大事悉ク御伝授」とある。年齢に若干のずれはあるが、これは国分寺再興の時と考えて差し支えない。

永禄五年以降、次に清胤との交流を示すものは元亀四年（一五七三）七月十六日の清胤の書状である（同月二十八日天正と改元。以下、天正元年とする）。この年、謙信四十四歳、清胤五十二歳である。書状によれば謙信は清胤を越後に迎えようとしたが、清胤は字頭職に昇進したので下向できない。来年秋末には必ず下向したいと言う。ここでこれを天正元年と特定するのは、清胤の年齢と字頭昇進の関係、清胤が天正二年秋末に越後下向を果たすこと、謙信が天正二年に大乘寺

を普請し、高野山寶性院の末寺として中興していることによる。

第二節 謙信の法体と信仰

高野山では古くから浄土信仰が盛んであった。奥の院からは越後関係では、元享三年（一三二三）の宝篋印塔二基が発見されている。それには「為現世安穩後世善所、於上品上生地」と刻されている。⁽²⁵⁾また高野山における宿坊制度は室町初期には成立していて、足利將軍代々の参詣が師檀関係を促進強化していった。そして戦国期には高野聖の廻檀によって宿坊と檀那は密接につながり、戦国大名の多くが領国単位で宿坊契約を結んで、参詣や納骨が盛んになっていく。足利氏と安養院、大内氏・武田氏と成慶院、南部氏と遍照光院などである。⁽²⁶⁾

謙信は、天正二年（一五七四）三月十一日、関東の陣中から清胤に書を送り、「越後国貴院旦那之事、師檀契約已厚矣、然則不啻予累葉、旗下将士及分国之檀契、亦可准同于予者也」と、無量光院との師檀の契約をなして、将士の檀契もこれに準じることとした（『越佐史料』天正二年三月十一日の条）。

そして、この年の十二月半ばに清胤が二度目の越後下向をする。清胤は寶幢寺を宿舍とし、謙信は清胤を師として剃髪する。この時、謙信四十五歳、清胤五十三歳である。『謙信年譜』の天正二年冬十二月十九日の条には、「管領御剃髪、護摩灌頂執行有テ法印大和尚ニ任セラル」とある。また謙信の天正三年四月二十四日付の祈願文（家わけ九）にも「去年極月十九、令法体」と記しており、謙信が天正二年十二月十九日に法体となったことは明らかである。

清胤は謙信の法体を、その六ヶ月後の天正三年六月五日に高野山寶性院へ報じた（以下これを清胤書状という）。この書状から「護摩灌頂執行有テ法印大和尚ニ任セラル」ことが同じ十二月十九日でないことが判明し、その他の従来の諸説も修正される（傍線筆者）。

懇令啓札候。仍太守謙信依年来之御宿望去年被成法鉢。愚僧与師弟之御契約。四度傳法之儀式如法被相遂。永宗門之制誠不可有違犯之旨御誓詞嚴重候。此趣衆徒中江可被成御披露、以御内證使僧被差登、御直書並學呂惣分江黄金百両進獻。貴院江別而黄金拾両被進之候。是又現世之非御名聞、高野靈地之為鉢先年御見聞之上、彌彌殊勝被思食入之間、後世菩提善根可被成置、其山御懇志之故、如此候。依之別而一院有御再興、御菩提所被相定。惣者大破之伽藍之儀、連々修造可被仰付御臆意候。此等之趣、衆徒中被成御披露、被及御回報者可為御喜悅候。恐々謹言。

六月五日

寶性院

寶幢寺

清胤（花押）

御同宿中

この書状の最初に「謙信依年来之御宿望去年被成法鉢」とあり、謙信は長年の宿望がない全くの法体となったことが明らかである。次に「四度傳法之儀式如法被相遂」とある。「四度傳法之儀式」は真言宗の重要な儀式である四度加行と伝法灌頂を指している。

四度加行は、伝法灌頂に入壇する前提として、十八道・金剛界・護摩・胎藏界の都合四度の修法を修する。修行中は門外不出で、一日三

回、午後、未明、午前の順序で行ずる。作法も嚴重で一切中断は許されず、万一中断したときは開白時よりやり直しをする。ここで仮に豊山派の法式によれば、時代により日数は八百日、二百日余など変化があるが、次第に短縮されている。現在、豊山派では二百七十七日とされ、省略した場合は百二十五日となっている。

次に伝法灌頂は、出家の弟子に金胎両部の秘法を授けるもので、真言密教における最も重要な儀式の一つである。伝法灌頂を受けた者が伝燈大阿闍梨の職位で権大僧都の僧階を得る。真言宗で最も嚴肅で大掛かりな儀式で、約一週間を要する。灌頂に際しては師から弟子に印契と印信、血脈が授けられる。血脈は密教の秘法が正しく伝授された証明であり、これなくしていかなる修法も効験なしとされる。

謙信はこの四度加行と伝法灌頂を法に従い遂行した。「無量光院旧記」では謙信寿像の裏書には、「伝授大阿闍梨法印大和尚位清胤、教授阿闍梨権少僧都澄舜」と記されていたとし、伝戒師が清胤、教授師は澄舜であつて、法に従った法体であることが明らかである。

仮に四度加行を前記の豊山派の略式で計算し、伝法灌頂に七日を要した場合の日数と、剃髪した天正二年十二月十九日から北条氏を調伏した天正三年四月二十四日までの日数が等しい。また、景勝に加冠し「彈正少弼景勝」と名乗らせた天正三年二月十一日(家わけ二〇二号)は、十八道加行を終えた日と同じくなる。この計算が正しいとは言いい切れないが、この一致は偶然であろうか。さらにこの期間に謙信に直接関係する記録は『御書集』『謙信年譜』のいずれにもみられない。まさしく四度加行と伝法灌頂を法の如くに遂げたことが推測される。謙信は

伝授された血脈をもつて北条氏調伏の祈願をなしたのであろう。

第三に謙信は莫大な黄金を献上する。それは「高野靈地之為躰先年御見聞之上」「大破之伽藍之儀、連々修造可被仰付御臆意」のためという。高野山は永正十八年(一五二二)二月の大火で山上の堂社が悉く炎上した。この復興は官宣旨によつて行われ、各院家も個々の勧進によつて復興に努めている。⁽²⁹⁾ 焼亡から謙信登山まで三十年を経過していたが復興には至らず、大塔は文祿二年(一五九三)になつてようやく完成している。謙信は、「現世之非御名聞」「後世菩提善根可被成置、其山御懇志之故」との意志により黄金を献じたのである。

真言宗における阿弥陀信仰は、阿弥陀仏の表白文に「清淨ノ壇場ヲ開キ瑜加ノ秘法ヲ修ス。若シ尔者、現受無比樂ノ願イ早く円成シ、後生清淨土ノ望ミ速ヤカニ満足セン」と見えるように、単なる称名念仏ではなく、瑜加の秘法を修するものである。謙信の場合、当時の高野聖を媒介とする庶民的信仰ではなく、清胤に伝授された秘法を修すること、往生と罪滅の願いを叶えようとするものであったと考える。

前述の「守筋目」願文を納めた弥彦神社の本地仏は阿弥陀仏であり、同所に祀られる弥彦太郎王子呉竹、二王子船山明神の本地仏はそれぞれ正観世音菩薩、勢至菩薩である。⁽³¹⁾ また「看經之次第」で第一にあげているのは阿弥陀仏である。さらに元龜三年(一五七二)の分国の安寧を願う祈願文(家わけ三三六)には「阿弥陀・日天・弁財天」の印判が用いられた。これは春日山城内の祈願所に納められたもので、秘法を修して祈願されたものであろう。

さらに「無量光院旧記」には、次のようにある。

越府 尔寶幢密寺一字御建立、高山より清胤法印を御請待、忠死義死之將士位牌御建、清胤 尔回向を御頼。高野山無量光院 尔おも（中略）義士忠臣等之位牌を御建、施主景虎、輝虎又ハ政虎、心光謙信等と裏書之御位牌石塔數十基今以有之。

国分寺再興の折に清胤の宿所として建てられた寶幢寺は、実は家臣の廻向のためのものであった。寶幢寺、無量光院の両寺には謙信が施主となつて廻向した家臣の位牌が多数納められ、その極楽往生が願われたのである。これは前述の天正二年の師檀契約によるものと考えられる。謙信の信仰の中で阿弥陀信仰は重要なものであった。

第三節 高野山における謙信法体の認証

清胤書状は寶性院宛であるが、同内容の書状を高野山の複数の寺院にも送った。その返書として次の三通がある。『御書集』はこれらを天正三年七月の条に掲載する。清胤書状とこの三通の書状はこれまで関連づけて論じられなかった。

第一に無量壽院快慶の書状（家わけ六）である。快慶は天正十六年（一五八八）に金剛峰寺第二百四世寺務検校となる無量壽院の住持である。当時、無量壽院は寶性院とともに、それぞれを門主とする壽門、寶門の学侶方の両学統を成している。無量光院は寶門に属するが、壽門の無量壽院へも謙信の法体を報じて承認を求めたのである。これは壽門本山からの証書ともいえ、宛名を「謙信法印御房」とする。文中「密家所帰之旨賢慮、誠不及悉知処」は、謙信が伝法灌頂を遂げた志（賢慮）は、他の戦国武将の形骸化した入道姿（悉知）が及ぶものではない、という対比と考えられ、謙信に対する快慶の視点が注目される。

次は無量光院有義のもの（家わけ六）である。署名は「無量光院有義」であるが、有義は正智院の住持で、清胤不在の間に無量光院の寺務を専らとした。当時、正智院は寶門の筆頭寺院として学侶の養成所たる立場にあった。その所蔵文書では寶門の諸院家について言及しており、寶門の中心に正智院があつて諸院家はその指導・支配下に成立していたことが知られる。また有義が発給した僧位補任状もあり、これは正智院に法印大和尚位の第一次的任命権があることを示している。⁽³²⁾

有義は「謙信法印御房」と謙信の法体を承認し、「希代勝事」と讃えた。また「一家繁榮之嘉瑞不可過之」は、清胤書状にいう謙信の「御直書」に対するものであろう。直書が失われているので正確な判断はむずかしいが、景勝への加冠によって上杉家の安泰が図られたとする内容であつたとも考えられる。これらに対して無量光院では「満寺開喜悦之眉」のである。あるいは清胤書状の「一院有御再興御菩提所被相定」は、有義書状の「無量光院可被成御願之寺」によって、謙信が菩提所と定め修理したのは無量光院であることが知られる。

三通目は快宣のものである（『御書集』天正三年七月の条）⁽³³⁾。快宣は関東管領上杉家の菩提寺清浄心院の住持である。清浄心院は戦国期には関東の佐竹氏、結城氏、那須氏などと接触を深めているが、上杉氏とは特に謙信期から交信が深まり、「越後国供養帳」⁽³⁴⁾がその実態を物語っている。書状は簡潔な文章であり、「快然無二」の一言で「謙信法印御房」への祝儀を表している。

第三章 景勝の謙信廟「御堂」建立と祭祀

第一節 謙信の死と越後時代の供養

謙信は天正六年（一五七八）二月に京都から画工を招いて寿像を描かせた。寿像が完成した同年三月十三日に謙信は死去し、景勝によって高野山無量光院に納められた。この画像は、無量光院『先師過去簿』に、「存生納都率天上絵像於法印之所定」とあるように法体の謙信が雲の上に乗る姿であった。「無量光院旧記」には画像裏書として、

件之御寿像者越後国太守前上相藤原朝臣輝虎改而称謙信、依離俗出家之御志御法体、戒律堅固、受秘密之深法伝両部之瑜伽給。遂阿闍梨之職位給畢。天正六年戊寅三月十三日未刻頓滅。同日御寿像出来畢。御歳四十九歳。四十九年一睡間御結頌、兼知死也期給歟。不可思議。

高野山無量光院依御菩提所被御定令安置之畢。

伝授大阿闍梨法印大和尚位清胤、教授阿闍梨権少僧都澄舜

と記されている。

さて、謙信の死後、その遺骸には甲冑が着せられ、甕棺に納められて埋葬された。『御書集』の天正六年三月十五日の条には、

同年三月十五日、兼而任御遺戒被送葬（中略）御甕棺不奉改御平常御身体、使帶甲冑而于、御城山奉拜埋之。兼而奉称号諡之。

不識院殿真光謙信法印大阿闍梨尊儀公。御導師春日山大乘現住長海法印矣。

とある。『謙信年譜』（同日の条）もほぼ同様であるが、「平生ノ御武

威ヲ不変甲冑ヲ着サシメ不識院内ニ葬埋シ奉リケル」とする。『御書集』の「不奉改御平常御身体」をここでは「平生ノ御武威ヲ不変」と記して武威を強調し、さらに埋葬地を不識院内と特定している。謙信の埋葬された場所は、春日山城本丸の北下方に並ぶ護摩堂、諏訪社、毘沙門堂、不識院と呼ばれる曲輪跡の一角であろうと考えられる。

謙信の死後、継嗣の乱（御館の乱）を経て景勝が上杉家を継承する。天正十一年（一五八三）まで謙信の供養に関する記事は『覺上公御書集』、『景勝年譜』ともに見えず、高野山清浄心院の所蔵文書がわずかにそれを物語る。

清浄心院に宛てた天正七年四月の飯田長家書状には、「謙信為菩提、月盆之金子一兩、乍乏少進覽之候。御焼香奉頼存候」とあり、同じく下条昌親の「壬三月十九日」付書状には、「為甲日牌二本御立可被下候」とある。景勝在世中の「壬三月」は四回あるが、そのうち天正八年は、謙信三回忌、憲政一周忌にあたり、「日牌二本」とは謙信と憲政と考えられる。また年末詳の景勝書状が三通あり、それぞれ、「謙信志之儀付而、（中略）導師之儀、寶性院有御相談、無量光院被相定」「来年三月十三日謙信追膳に付而、於金堂三日御法事各頼入候」「於謙信廟前、昼夜之勤行無御退転」とあり、高野山金堂や廟前での供養を依頼している。高野山の謙信廟は天正十三年に建立されている。

越後においては、天正十二年に七回忌法要を営むべく、景勝は無量光院清胤に下向を求めた。その書状（『越佐史料』天正十一年九月十七日の条）には、「遠路御老足、海陸共御勅身雖痛入候、有光駕、来弥生十三之法事執行、休尊靈之鬱胸申度候。此念望日夜無止事候」と

ある。謙信死後の騒乱も鎮まり、謙信の鬱胸を晴らさんとしたのであるが、清胤の下向が実現したかは明らかでない。この後、天正十八年には謙信十三回忌にあたり清胤が下向している。

第二節 景勝の御堂建立

景勝は慶長三年（一五九八）に会津に転封となるが、謙信廟はそのまま残し、大乘寺、妙観院、寶幢寺のみを留めて廟所の守護と法要を厳重にした。替わって春日山城に入った堀氏は早速に廟の移転を催促してきた。これは、大乘寺が城内にあり妙観院と寶幢寺が城内に入入りし、後述するような祭祀が当時から行われており、堀氏がこれを嫌ったためであると考えられる。そのため同年八月、景勝は三ヶ寺に命じて謙信廟を会津に移すこととした。その書状（『景勝年譜』慶長三年八月二日の条）には「其元之衆切々催促付而無是非」とある。

会津からは路次の警固と指図のため岩井、山岸、広居の三士が派遣された。謙信の棺を掘り出し、別に新椁を作って棺を入れ、道中自由になるようにし、謙信の棺に触れる者は能化衆か丁寧なる出家衆に限るとした。派遣の三士も与らず、粗漏不敬があれば神罰を蒙るゆえに、よくよく入念であるようにと命じている。同月中旬、会津に到着し、城内西南の隅に仮殿を造営して安置された。同五年三月十三日、謙信二十三回忌には隣国の僧徒を集会して一万部法華經を執行している。関ヶ原の合戦を経て同六年、景勝は米沢に転封となり、謙信の遺骸も米沢城に移され、初めは本丸西南の御蔵（宝物蔵）に仮安置された。その後、慶長十四年に本丸東南隅に廟堂の建立を開始する。『景勝年

譜』慶長十四年六月五日の条に次のようにある。以下、米沢藩の呼称により廟堂を「御堂」という。

夏六月五日 御本城ノ東南ニ廟堂ヲ経営アルヘキ旨仰出ル。材用ノ調度御沙汰アリ。堂ノ外面隄池ヲ鑿闢シ、隄口三間ハカリ高丘ヲ築カシム。隄池ニ向テ御堂勤番ノ僧侶ヲ差置ルヘシ。是故ニ寺院ノ造立モ命アリ。所謂今ノ九箇寺十一箇寺是ナリ。

転封後八年を経ているが、それまでは勤仕の寺院も整備されていなかったことになる。しかし何らかの形で謙信の法要が行われていたと考えられる。これ以前、同九年の謙信忌日には城北の万部堂で二十七回忌の一万部法華經を修している。万部堂は四代藩主綱憲の代まで存在し、東西四十五間、南北四十六間、四方に土居を築き、境内には殿堂、鐘樓、太鼓、対面所、番所が建てられていた。⁽³⁷⁾これがその代役を果たしたと考えられる。城内の御堂本殿の完成は同十七年である。

このように最も重要視される御堂の造立が遅れたのは、度重なる幕府の手伝普請や將軍秀忠上洛への供奉があったことによる。また会津時代の大規模な神指城の普請が家康に危機感を持たせ、会津攻めの原因の一つになったためでもある。寺院の建立とはいえ、城の本丸、二ノ丸に手を加えることがはばかれたのでもあろう。

『御堂秘事』⁽³⁸⁾によれば完成した御堂は、横六間、縦十三間で、内陣本壇は三間四面の大きさである。中央正面には二間四面程の謙信の遺骸を祀る宮殿があり、その右に善光寺如来、左に毘沙門天が安置された。御堂西側には御堂を管理する靈仙寺が置かれ、城内に寺院があるという景観である。堀を隔てた二ノ丸には御堂に奉仕する二十箇寺が

置かれ、これを総じて二ノ丸寺院（二ノ丸二十二箇寺）という。

二ノ丸寺院の数は時代によって異なるが、『景勝年譜』には、「所謂今ノ九箇寺十一箇寺是ナリ」とあるから、年譜成立の元禄十六年（一七〇三）にはその形が整っていたことを示している。二ノ丸寺院はいずれも真言宗である。このように本丸に廟所を構え、二の丸にそれに奉仕する寺院を配置する例は他に見られない。真言宗寺院を菩提寺とすることも合わせて、他藩に類例のない米沢藩の大きな特徴である。

御堂の取り締まりは極めて厳重であり、慶長十七年に最初に出された掟（『景勝年譜』慶長十七年十月二日の条）は次のようなものであった。これは景勝が参勤のため江戸に発つ前日に出されており、特に藩士に対して留守中の管理を託したものである。

- 一 御堂番出入之出家一僕之外不可入、総而刀差一切停止之事
 - 一 御法事之節、出仕之諸士徒僕共不可入之事
 - 一 番人病氣差合之時、為代不案内者不可出之事
- また二ノ丸寺院が本丸に入る時に通行する南門の番所に壁書を出し、
- 一 此御門出入之者、以切手可往還縦切手有之共、暮六以後一切不可出入事

一切手有之者成共、自南御門東北不可出入、就中鉢伏間之道堅可停止之事

と、その通行を厳しく規制している。

さらに御堂では特に火の用心に配慮された。明暦元年（一六五五）の「御堂近火手配之図」⁽⁴⁰⁾には詳細な手配の手順が記されている。特に謙信本壇、善光寺如来、毘沙門天の守護について、二ノ丸寺

院の役割が次のようにある。「臈」は輪番制による組のことである。

- 一 御本壇一式、一臈組御堂衆二臈組加り合テ七人相詰候等之事
- 一 如来ハ、二臈組御堂衆合テ五人^二而請取之筈之事
- 一 毘沙門ハ、三臈組御堂衆合テ六人^二而請取之筈之事

右三尊御鑑、不断御茶之間^江掛置候事

この他にも御堂守護のための条目はたびたび出されており、何よりも謙信の遺骸を守ることが第一とされたのである。

第三節 御堂における勤行と信仰

「御堂近火手配之図」によれば御堂内陣本壇（謙信壇）の周りには、四振りの太刀が置かれている。正面に長光、右に国綱、左に国光と助宗、いずれも謙信愛用の太刀である。第一章で述べた謙信の「筋目」、武威を示すものである。また「御堂内陣図」⁽³⁹⁾によれば、本壇の中に謙信の甕棺を納めた宮殿があり、その前に護摩壇を置き、「大乘妙典、密筥、戒鉢筥」が供えられている。密筥には、「密箱入品 將軍地藏法一冊、御数珠一連、御五鈷一本、金剛線一筋、御鏡一面、御柄香炉一ツ」が納められている。これらは伝法灌頂に用いられるもので、これは第二章で述べた、法体した謙信の姿を示すものである。

左の毘沙門堂には、本尊と前立本尊の他に、「文殊大士、歓喜天、不動尊」が祀られた。また「御旗箱」が置かれており、「天賜之御旗」や「刀八毘沙門」の旗が納められていたものと考えられる。右の如来堂には、「秘仏、如来像」が祀られ、棟札と長持が置かれていた。この善光寺如来は、川中島合戦の折に、信濃の中野城主高梨氏が戦禍を

逃れるために善光寺本尊（前立本尊）を奉じて謙信に従ったことにより、謙信は越後に善光寺を建立してこれを祀ったものである。門前には信濃の住人等が移住し門前町が形成されたという。転封にあたっては善光寺は随伴せず、本尊と仏具だけが米沢にもたらされた。

さて、この御堂に奉仕する二十一箇寺とは、法音寺、大乘寺、蔵王堂をはじめとする能化衆（院家衆）十一箇寺と、御堂衆と呼ばれる九箇寺および御堂全般を管理する靈仙寺である。能化衆は全て越後、信濃、関東から随伴したもので、御堂衆はいずれも法音寺の末寺として米沢で新立されたものである。靈仙寺も法音寺の末寺であるが、御堂管理の上では法音寺以上に権限を持っていた。この他に住坊を持たない御膳衆六人があり、朝夕に謙信に供えられる膳の調理と供膳を行っていた。高野山大師廟における維那の役目を負うものである。

二ノ丸寺院は藩主と世子の逝去にあたってのみ、その法務を取り仕切り、最終的には法音寺が遺骨を奉じて京に上り、大覚寺門跡の執奏により「法印権大僧都」の位を得て、高野山清浄心院に納骨する。法音寺は二代藩主定勝の死去の際に、大覚寺門跡尊性法親王より大覚寺の院室菩提心院を兼帯させる令旨を与えられた。その後、八代藩主重定以降は土葬とされ、この時から大乘寺が位牌を奉じて高野山に登ることに変更された。これは大正八年（一九一九）の茂憲まで続いた。なお謙信が大乘寺を菩提寺と定めたことから、謙信の追善供養の導師は必ず大乘寺が勤め、景勝以降の藩主の法要は法音寺が勤めている。

詳細は省くが、御堂に祀られるのは謙信の遺骸と、藩主及び世子の位牌のみである。また藩主と世子のみは城西の廟所に真言宗で祀られ

るが、藩主夫人や庶子は曹洞宗の林泉寺または浄土宗の極楽寺、あるいは江戸で没した者は江戸の寺院に埋葬された。さらに景勝以降宗房までは廟所には五輪塔が建てられただけで、納骨された高野山が埋葬墓となる。他藩には見られない特異な形態である。

御堂における日々の勤行について、『御堂年中行事』（マイコロ）からみていく。その初めには輪番の役割が記され、日々の勤行は能化衆、御堂衆ともにそれぞれ三人一組の輪番制により四日三夜の勤めとして行われることが示されている。次に元朝から大晦日までの毎日の法要、膳の内容の詳細等を記している。以下、用語は記事のまま記述する。

元朝の例を見れば、丑刻から始まり、まず当番頭の院家が謙信壇で理趣經之法を修し、続いて如来壇で弥陀之法を修す。毘沙門壇では当番の院家が多聞天之法を修す。この間に上段では当番の御堂衆と院家同宿により後夜の読經がなされる。『錫杖』一卷、『理趣經』一卷、『陀羅尼』三卷、『心經』三卷、『大般若經』五箱である。同時刻、御膳衆は膳を組立て、御堂衆が謙信壇に七目の膳と茶湯、水を供える。

寅刻に移って、一膳と大乘寺が、『錫杖』一卷、『心經』、『唐本大般若經』全六百卷、『心經』を読經し、次いで大乘寺が謙信壇で理趣經法を修し、二膳番頭が如来堂修法、三膳番頭が毘沙門堂修法、最後に御堂衆が『法華經』の一卷を読む。『法華經』は毎日一卷ずつ読まれた。藩主が在国の時には参詣があり、謙信壇に太刀と馬代が献じられる。午中刻には五目の膳が供えられ、未刻に靈仙寺が御膳經として『尊勝陀羅尼』三巻を読む。続いて初夜法要として『理趣經』一卷、『陀羅尼』三巻が当番頭の院家によって読まれ、一日の勤行が終わる。

次に謙信の供養は、毎月十三日の月忌には、大乘寺が導師となり理趣三昧が修され、この日は特に神酒が供えられ、藩主の在国時は参詣があった。三月の祥月忌には、朔日朝より始めて十箇日間、結衆百三十人で『法華經』千部を誦誦し、十一日、十二日には曼荼羅供を修し、十三日には大乘寺の導師にて二箇法要が行われた。三月二十一日には高祖大師御影供として謙信壇に膳が供えられる。このことは御堂が高野山大師廟を模していることを示している。

また特に注目されるのは、正月四日朝に大乘寺が導師となつて行う祈禱で『仁王經』が修されるものである。記載はないが大乘寺が導師であるので謙信壇で行われたものであろう。これは「上杉之御家二古來亡敵ノ怨靈有之故」であるとする。また同日から二夜三日で行われる別事祈禱は五大明王を本尊とし、衆徒中で『仁王經』を誦誦する。これは「先年浅野内匠頭主従四十七人ノ怨靈此 御家二有之由」と、五代藩主吉憲が始めた。四代藩主綱憲は吉良上野介義央の実子である。

この他には、毎月十五日は総出仕で謙信壇において『仁王經』全部が誦誦される。この日は膳に勝木かつのきの箸が添えられた。当初は朔日、十五日、二十八日、晦日に行われていたが、仏事省略のことから後に十五日のみとなった。月別の行事としては、正月二十二日から二夜三日の火伏の祈禱、七月十三日晚から十六日朝までは施餓鬼が行われる。また六月晦日には謙信本壇の周りに置かれた太刀の錆落としがなされ、常に謙信の武威を保とうとしている。

ここでは『御堂年中行事』の一部分を取り上げたが、全体的に見て

も、御堂で読まれる主經典は『仁王經』『大般若經』『法華經』という護国經典である。謙信の武威、加護によって米沢藩、上杉家の安泰を願う祈りが行われていたことが読み取れる。

第四節 歴代藩主「御武具召初」の儀式

「御武具召初」は藩主が初入部後の正月十三日に御堂に参詣し、具足を着けて勇姿を謙信の靈前に披露する儀式である。十三日は謙信の月忌日にあたる。御堂で行われることが米沢藩の特徴である。

「御武具召初」の記事は四代藩主の『綱憲年譜』に初見され、十二代藩主齊憲までの歴代年譜に見える。⁽⁴³⁾ここではその概要を『重定年譜』から、登場する家臣名を省略し、儀式の内容のみを見ていく。

正月十三日、御入部年始先蹤ノ吉例ノ如ク、御堂ニ於テ御武具召初ニ付テ、予シメ御鎧ヲ御堂御二之間ニ飾之。長柄銚子、御摘物きりぎりす餅三供白奉、謙信公御靈前ニ備フ。白木三方三土器、同功ノ物十五切レ土器入、御箸瓶子備置ク。御甲黒塗星、御立物將軍地藏。御鎧黒ニ右御前ニ飾リ、左ニ八幡ノ御弓捧之。御右小道具。

御矢持御左ニ。御甲持御左ニ、御刀持同捧之。御札拝畢テ御下着、御中帯、小袴召サセラレ、御飾之間唐櫃ニ御腰掛ラレ、御靈前ニ対シ玉ヒ、御鎧道具召サセ奉ル。甲冑悉ク御固メノ上、日月表文ノ扇形差上、扇形五間披キ、呪文誦誦シ玉ヒ、（『齊憲年譜』では、ここで奉行が「日頃ノ御本望遂サセラレ天晴ノ御大將勇マシク恐れニ存奉ル」と祝儀を述べるとある）日輪ヲ表スル方ヲ御身ニ副ラレ、三タヒ扇キ玉フ。御太刀、御脇差、御甲、御頬当、御鉢巻

取ラセラレ、御拝靈。畢テ前ノ如ク唐櫃ニ御腰掛サセラレ、御鎧ヲ脱カセラレ、御装束改メ玉ヒ、御帰殿。再び御堂御參詣。御太刀、馬代御進献。毘沙門へ御初穂献セラレ、御帰殿。

各年譜には各藩主が用いた兜が示されている。網憲は「御立物毘ノ字」とある。現在、大型の「毘」の字の前立だけが残っている（上越市・林泉寺所蔵）。吉憲、宗憲、宗房の三代は詳細な記録がない。重定は「御甲ハ黒塗星、御立物ハ勝軍地藏」とする。これは、黒漆塗鉢で前立物に金鍍金の日月、勝軍地藏、不動明王、毘沙門天と銀鍍金の雲、吹返に金蒔絵の竹雀紋を付けるものである（上杉神社所蔵）。

治憲は「謙信公御召御兜、黒塗星御立物向ヒ鳳凰」、治廣は「御兜黒塗星、御立物向ヒ鳳凰」、齊定は「御兜謙信公御召黒塗星御立物向鳳凰」、齊憲は「御兜不識公御召黒塗星、御立物向鳳凰」と同じものが使われている。「向鳳凰」の前立は、一對の鳳凰が向き合い、その上には「日天、將軍地藏、摩利支尊天、不動明王、愛染明王、弁財天、飯繩大明神」の名を刻した円板を置くものである。これは現在は、家康の会津攻めの時に景勝が着用したものである（米沢市・宮坂考古館所蔵）が、歴代年譜では「謙信公御召」としており、藩政期には謙信所用のものとして認識されていたことが知られる。

いずれの場合にも、謙信所用の神仏名、神仏像を表した兜が用いられたことは、新藩主がそれによって謙信と一体化することを願ったためである。新藩主が謙信と毘沙門天の前に、謙信着用の兜を身に付けて謙信と一体化し、藩主としての武威を示し加護を祈ることは、藩主の「日頃ノ御本望」であり、謙信をその精神的支柱としたためであ

る。

また景勝は遺言状（家わけ一〇四七）で、自らの葬儀や年忌供養に言及し、法名を「宗心」とすること、導師は法音寺とし、高野山においても弔いをする^{（号一〇四九）}こと等を述べている。景勝は謙信と同様に真言宗に帰依すること深く、その死後、大覚寺門跡の執奏で「覺上院殿権大僧都宗心法印」と諡され、高野山には謙信廟に並んで景勝廟が建てられた。「宗心」は謙信が大徳寺宗九から授けられた法名であり、景勝は謙信の法名を自分の法名とすることを遺言した。これもまた、景勝が謙信と一体化することを願ったものである。

今後の課題 — むすびにかえて —

以上本論では、謙信の信仰を根底にまで掘り下げることと、藩政期における米沢藩の謙信廟（御堂）の祭祀を明らかにし、これを関連づけるこれまでにない試みによって、新たな謙信像を見出すことができた。

一方、新しい課題も多く見出された。謙信はなぜ「筋目」を守ることを弥彦神社に誓ったのか。越後一宮としての弥彦神社と国主としてのその祭祀に関わる謙信との関係からさらに考察していく必要がある。

次に、法音寺で多数所蔵する御堂関係の文書、經典の考察による御堂祭祀の実態の解明である。御堂祭祀を考える上では、謙信と景勝との直接的な関係を解明することも必要である。景勝に関する先行研究は多くなく、謙信との関係を論じたものはさらに少ない。

また米沢市上杉博物館所蔵の「武禰之次第」は、同博物館でもその存在は知られていたが、研究は進められていない。この全文を読み解くことで、謙信の出陣式の実態とそこに見られる謙信の信仰を解明することができると考えられる。

さらには謙信画像の研究である。伝世する形態の異なる数種の謙信画像の成立年代と、そこに見られる米沢藩主の謙信画像への信仰について考証していきたい。

〔注〕

- (1) 本論では便宜上、引用の他は謙信と統一する。
- (2) 竹田和夫「謙信の起請・祈願・呪法」は、起請文や軍記物、遺品から謙信の信仰を論じた(『定本上杉謙信』、池亨・矢田俊文編、平成十二年、高志書院)。木村康裕「上杉謙信の願文」は、願文からうかがえる謙信の性格を論じ、長谷川伸「上杉謙信の虚像——上杉謙信画像と要門派越後流軍学の展開——」は、謙信画像と要門派軍学者との関係を追究した(以上「新潟県立歴史博物館研究紀要」第五号、平成十六年、新潟県立歴史博物館)。
- (3) 『藩政成立史の総合研究 米沢藩』(昭和三十八年、藩政史研究会、吉川弘文館)、『米沢市史 近世編1』(平成三年、米沢市史編纂委員会、玉橋隆寛「米沢城二の丸二十一ヶ寺とその盛衰」(『置賜文化』第六九号、昭和五十六年、置賜史談会)。
- (4) 『越佐史料』(高橋義彦編、昭和四十六年、名著出版復刻版)、永禄三年四月二十八日の条。
- (5) 新潟県弥彦村・弥彦神社所蔵文書。上杉家文書第四九七号(大日本古文

書家わけ第十二、昭和五十六年復刻版)はその写。以下、上杉家文書は本文中に「(家わけ〇〇号)」と記す。

- (6) この旗は上杉神社等の所蔵。為景、晴景の対朝廷関係については、長谷川伸「長尾為景と晴景」、小林健彦「謙信と朝廷・公家衆」(いずれも前掲(2)『定本上杉謙信』)がある。

- (7) 米沢市上杉博物館所蔵文書。これによれば、武禰式で勧請される仏は摩利支天である。上杉神社所蔵の「禰祭剣」は謙信の出陣式で摩利支天法修行の時に使用されたとされ、武禰式との関係の解明が必要である。

- (8) 『日本の中世国家』(佐藤進一、昭和五十八年、岩波書店) 参照。

- (9) 看経所奉納は上杉神社所蔵文書。「看経所」の位置は特定されていない。

- (10) 『新潟県史資料編5中世3』所収、第二六四六号。

- (11) この他「新潟県史資料編5中世3」所収の第三八四二号、第三八四二二号、第四〇二二二号、第四〇三三五号に謙信の「筋目」がみられる。

- (12) 前掲(6) 小林論文。

- (13) 『謙信公御書集』(平成十一年、臨川書店)。以下『御書集』と略す。

- (14) 「上杉家御年譜」(昭和五十一年〜同六十二年、米沢温故会編)。以下「謙信年譜」と略し、景勝以後の年譜も『藩主名』年譜』とする。

- (15) 「国分寺の中世的展開」(追塩千尋、平成八年、吉川弘文館) 参照。

- (16) 『国訳大藏經』経部第十一集(大正七年、国民文庫刊行会) 所収。

- (17) 『新潟県史資料編5中世3』所収、第二七八四号「弥彦神社古縁起写」及び第二七八五号「弥彦神社縁起断簡」。

- (18) 『歴代古案第二』第三七九号(平成五十四年、統群書類従完成会)。

- (19) 『金剛峯寺諸院家析負頼』(『続真言宗全書第三四』、続真言宗全書刊行会) 所収。

- (20) 『高野山正智院経蔵史料集成1正智院文書』(平成十六年、吉川弘文館) 所収、編年文書第八二二号。以下「正智院文書」という。

(21) 市立米沢図書館蔵、上杉文書マイクロフィルム版第二四九号、「高野山無量光院持参之御書」。以下「無量光院旧記」という。以下、マイクロフィルム版は本文中に「(マイクロ〇〇号)」と記す。

(22) 『佛教綱要』(昭和四十五年、改訂三版、真言宗豊山派宗務所) 参照。後述の四度加行、伝法灌頂も同じ。

(23) 前掲(2) 木村論文は謙信の願文の一覧表を掲載する。

(24) 『歴代古案第一』 第一五〇号。

(25) 『新潟県史資料編5中世3』 所収、第四二九一号、第四二九二二号。

(26) 井筒信隆「高野山の歴史と弘法大師信仰」(『空海と高野山』、京都国立博物館他編集、平成十五年、NHK大阪放送局他)

(27) 無量光院所蔵文書。刊本は『越佐史料』の天正三年六月五日の条。

(28) 『伝法院流四度加行要集』(真言宗豊山派)。

(29) 『正智院文書』 編年文書第八五号、第八七号。

(30) 『真言密教事相類聚解説部第十巻 諸尊表白集』(平成三年、青山社)。この原典は、無量光院一世印融の著である。

(31) 前掲(17)。

(32) 『正智院文書』 歴代院主讓状第一八号。編年文書第九三号。

(33) 『越佐史料』 は天正三年六月五日の条で、柳澤氏所蔵文書とする。

(34) 山本隆志・皆川義孝「高野山清浄心院蔵『越後国供養帳』」(『上越市史研究』第一〇号、平成十六年)。

(35) 『覚上公御書集』(平成十一年、臨川書店)。

(36) 『大日本古文書家わけ1高野山文書』 所収。

(37) 『上杉神社誌』(大乘寺良一、昭和五年、上杉神社社務所)。

(38) 上杉家文書文化庁指定第一二八四号(平成十三年三月 上杉家文書目録、文化庁文化財部美術学芸課)。

(39) 上杉家文書文化庁指定第一二九一号。

(40) 謙信の本陣旗「刀八毘沙門」の旗は上越市・林泉寺他の所蔵。

(41) 善光寺如来を奉じた者は諸説あるが、ここでは法音寺の寺伝に従う。

(42) 法音寺所蔵『八海山法音寺日記書拔』。

(43) 『綱憲年譜』 延宝八年、『吉憲年譜』 宝永三年、『宗憲年譜』 享保十二年、

『宗房年譜』 元文二年、『重定年譜』 延享五年、『治憲年譜』 明和七年、

『治廣年譜』 天明八年、『齊定年譜』 文化十一年、『齊憲年譜』 天保十一年の、各正月十三日の条。

(かざわ まさと

文学研究科日本史学専攻修士課程修了)

(指導・今堀 太逸 教授)

二〇〇七年十月十一日受理

